

企画セッション「海外で教材を作る！－企画から始まるギモン－」

話題提供者：大船ちさと（国際交流基金）

濱川祐紀代（国際交流基金）・家田章子（麗澤大学）

1. 本企画の趣旨

本セッションは委員企画セッションとして新たに企画されたものであり、話題提供者として海外で教材開発の経験がある大船ちさと氏（国際交流基金）を招き、セッションを企画・実施した。本セッションでは、教材作成に関する疑問や不安を出し合い、解決可能かどうか、どのような解決策が考えられるかを話し合い、整理していくことを目的とした。なお、「ギモン」とカタカナ表記にしたのは、「問題点」「困難点」といったマイナスイメージをもつ意味だけでなく、「ふっと思い浮かんだこと」「ちょっとした迷い」なども含めたかったためである。本セッションの参加者は委員・話題提供者のほか15名であり、3-4人程度のグループになって話し合いながら進めていった。

2. セッションの流れ

まず、教材作成をシミュレーションしながらワークを進めていくため、本セッションで想定している教材作成の背景・条件を共有した。

①教材作成の要請：海外の大学で日本語を教えることになり、その赴任先の大学から教材作成に関する指示が届いた。予算の都合上教材を購入することは出来ない。どの科目も1学期分の「オリジナル教材」を作成し、冊子の形態（簡易印刷）で学生に配付することになっている。授業開始まで2ヶ月。それまでに同僚と相談して教材作成を進めなければならない。

②担当科目について：観光学科4年生の選択科目（第二外国語）で、1学期90分×15回の総合日本語クラス。ただし、オリエンテーションやテスト等もあるため、授業は実質10回。同じ科目が3クラス開講され、複数の教師が担当する。どのクラスも教材や内容、進度を合わせる必要がある。

次に、教材作成の手順などを具体的に思い起こしながら、どのような疑問・困難・不安（以下、ギモン）を感じているか各自で書き出し、グループ内で整理しながら共有した。さらに、書き出した項目について、どのような解決方法があり得るかディスカッションし、解決可能だと考えた項目・解決方法が見つからなかった項目に分類した。これらの作業は、上述の条件の下に教材作成を疑似体験するような形で行った。

3. 参加者からの声：

セッションで出されたギモン

あるグループのワークシートを例に報告する（図1・表1）。教材作成に取り掛かる時点でのギモンとして書き出されたものを見てみると、「学習者の日本語のレベル、同僚教師の教授観

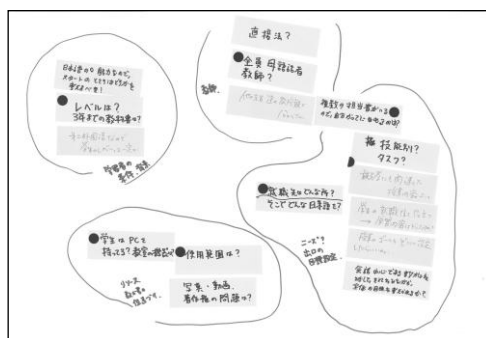


図1 あるグループの書き出したギモン

がわからないまま、授業内容や目標（ゴール）を決めなければならない」という状況にギモンを覚えていることがわかる。

表1 あるグループの書き出したギモン

*表1は図1を文字化したもの

カテゴリー	疑問・困難・不安
学習者の条件・背景	○開講時の日本語力は？ ○3年生までの教科書は？ △学生のレベルは一定か？
リソース・機材	○学生はPCを持っているか？ ○教室の機器は？ △写真・動画などの著作権の処理は？
教師	○全員、母語話者教師か？ △直説法か？ △他の先生はどのような教授観か？
ニーズや目標	○複数の担当者がいるが自分勝手に決められるか？ ○就職先はどんな所か？そこでどんな日本語が使われるのか？ ○技能別か？タスク型か？ △授業のゴールをどこに設定したらいいのか？ △観光学に関連した内容がよいか？ △学生が就職先でも役に立つ内容とはどのような内容か？

*○は解決可能だと考えた項目、△は解決方法が見つからなかった項目

また、他のグループのワークシートにも同様の内容が書き出されており、その他には「教材作成の期間が2ヶ月なのは短い」「どのような評価にするのか」といった項目が挙げられていた。しかし、書き出された項目のうち半数は解決可能なギモンだとされた。参加者からは、「教材作成に取り掛かる時点で思い浮かぶギモンの多くは、実際にはギモンではなく、同僚の先生と話すことで解決できるものも多いことが分かった」という声が聞かれた。

4. おわりに

日本語教師の実践に欠かせないであろう「教材作成」において、孤軍奮闘している人も多い。「実践」を共通項にもつ実践研究フォーラムにおいて、ギモンを持ち寄り、吐き出し、共有する場を設けたことは、参加者にとって有益な機会になったのではないだろうか。本セッション終了後、参加者からは「グループの人の考えていることがわかって、面白かった」「教材作成にも様々な視点があることに気づいた」「意見をすり合わせて作り上げていくことが大変だということに気づいた」「教材作成を計画しているので、ギモンが整理できたのがよかった」などの声があり、ギモンを書き出したり、ディスカッションしたりすることを通して、様々な気づきがあったことがわかる。これらの参加者の声から、本セッションの目的は概ね達成できたのではないかと考えられる。また、上述したように、本セッションは今年度新たに設けられた企画セッションではあるが、多くの気づきを提供するセッションになったと思われる。今後繰り返し実施するかどうかは、実践研究フォーラム委員で検討していきたい。

(文責：濱川祐紀代)